



おじいさんの思い出



川路 新吉

おじいさんの思い出

公園を散歩するのが好きだ。暇があればよく散歩に行く。

すると、顔見知りというものができる。

そんな中に一人のおばあさんがいる。

いつも同じベンチに座って、公園の中央に生えている木を眺めている、品のいいおばあさんだ

。何度か見かけるうちに、向こうもぼくの顔を覚えたようで、このごろでは会うとあいさつをする程度にはなったのだけど、ちゃんと話したことはまだなかった。

だから、このときが初めてちゃんと話したことになる。

それは雪の降った日だった。

南国育ちのぼくにとって、雪というのは意味もなく楽しい気分になってしまうイベントだ。

だから、その日、いてもたってもいられなくなって公園に散歩に行くことにした。

公園は雪が積もりはじめ、ところどころ白くなっている。

雪だるまを作る子供たちでにぎわっているかなと思っていたのだけれど、降り始めて間もないこともあってかあまり人はいない。

そんな寂しげな公園に、おばあさんがいつもと同じベンチにいつもと同じように座っていた。いつもと違ったのは傘を差しているということだけだ。

なぜ、こんな雪の日まで公園に来ているのだろうか。自分のことは棚に上げてそう思った。

「こんにちは」

あいさつをすると、少し驚いたようだった。だけど、おばあさんのほうもぼくの顔を見ると、優しい笑顔とあいさつを返してくれた。

「こんにちは、こんな日にお散歩？」

「おばあさんこそ」

普段ならここで終わって散歩を続けるのだが、その日は気になってしまった。

「お隣座ってもいいですか」

おばあさんは腰を浮かせてはじによってくれた。

「よくこのベンチにお座りになってますよね」

「あら、もしかして私のファン？」

そういっておばあさんは笑った。とてもチャーミングだった。

「いつも何見てるのかなあって不思議だったんですよ」

そう聞くと、おばあさんは笑った。

視線の先には一本の木があった。

大きな枝振りの立派な木だ。

「おじいさんとの思い出の場所なんです」

木を見るおばあさんの目は、まるで愛する人を見ているようだった。

「私の手を引いてよくつれてきてくれたの」

なるほど、この公園でご主人とよくデートしていたということなのか。

「すごく背の高くてすらっとした人でね。ほんとすてきな人だったわ」

その頃を思い出してか、うれしそうにほほえんでいる。

「そのころはこんな立派な公園じゃなかったけどね」

見つめていた先の木を改めて指さして言った。

「でも、あの木はその頃からあるの。よく登ったりして怒られたわ」

若い頃のおばあさんはなかなかアグレッシブな女性だったようだ。

その後もおばあさんの思い出話は続いた。おばあさんは終始笑顔だった。

ぼくも、おばあさんの楽しさが乗り移ったように楽しかった。だけど外は雪。さすがに寒くなってきた。ぼくは疑問に思っていたことを口にした。

「でも、こんな雪の日まで来ることはないんじゃないですか？お体悪くしますよ」

おばあさんの表情がふっと寂しそうなようになったような気がした。

「今日は特別な日なんです」

「特別な日？」

「今日はおじいさんの命日なんです」

ぼくはなんて言えばいいのかわからなかった。

「やあねえしんみりしちゃって」

ぼくは、小さくすみませんと言った。それを聞いて、おばあさんはなんであやまるのと笑った

。

「ほんとに突然だったから」

おばあさんはあの木をじっと見つめていった。

ぼくはやっぱり何も言うことができなくてただ隣でいっしょに木を見つめていた。

そのとき、公園の入り口のほうから男の声がした。

「おーいばあさん」

小柄で白髪 of 男性が近づいてきた。

どうやらおばあさんの知り合いのようだ。

男性はぼくの顔をいぶかしげにうかがっていたが、おばあさんが事情を説明すると、警戒をといた。

「こんなばあさんの話し相手をしてもらって申し訳ないね」

「ばあさんなんてひどいじゃない」

おばあさんは子どものように頬を膨らませる。

「私の主人よ」

え？ご主人？

たしかさっき命日って言っていたような。

「おじいさんはお亡くなりになったんじゃないんですか」

「ええ、もうずいぶん前にね」

「でも」

ぼくがご主人のほうを目でうかがうと、おばあさんはいじわるそうに笑った。

「私のおじいさんはね」

おじいさんの思い出

<http://p.booklog.jp/book/41415>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41415>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41415>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.